

# 随想



うまい具合に指定のベッドは下段で、私は入り込むと、頭のつかえを気にしながら、持参の球磨焼酎をチビリチビリやり始める。

窓外の闇の中に速く近く流れ去って行く光を眺めながら、こゝは電話のベルにも悩まされることもない別世界だと快い車の震動と酔い身をまかせ。

あの遠い灯のある所に家があつて、つましやかに人が住んでいるのだなと思つた時、山田洋次脚本監督の映画『男はつらいよ』シリーズ、寅さんを出した。

「ワタクシ、生れも育ちも葛飾柴又です。帝釈天で産湯を使い、姓は車、名は寅次郎、人呼んでフーテンの寅と発します。」

渥美清のゲタのような顔にソフト帽、ペンダントを下げたジュバンに腹巻き、腕を通さずにひっかけた上着姿、イボのついた眉毛の細い目をしばた、かせながら仁義を切るセリフを思ひ出すと、笑いがこみ上げて来た。最近喜劇ものもくだらな作品が多い中で、寅さんものは心から笑え、そしてしみりさせられる。

そうだ東京にいたら柴又に行つてみよう。  
大晦日は東海大松前総長の秘書課長を

している川崎生田の義兄の家で過し、元旦は雑煮を祝うと、ひとり小田急から山手線に乗り継ぎ、日暮里から柴又行きの電車に乗り込む。

千住を過ぎ、荒川の長い鉄橋を越えるとも葛飾であつた。

次第に電車が混んでくる、破魔矢を持った初詣の人々らしい。

柴又の駅に着いたら驚いた、人の波である。その波に押されながら、ようやく駅を出ると、門前通りを交通整理の警官の誘導で少しずつ進む。

柴又の町をゆっくりぶらつき、その情緒を味わおうと思つていた私は失望した。申年だからかな。

帝釈天の境内も人であふれ、沢山の猿の木彫りで飾られているらしい御堂に近づくことも出来ない、私は遠くから手を合わせて祈願した。

とにかくこの人混みから抜け出すことだと、ようやく比較的人の少ない通りへ出る。昔ながらの草だんごの店らしいものはと探したがなかなか見付からない。でもその露路から買物かごを下げ、子供の手をひいたサクラの姿が、又町工場のタコ社長が禿頭をかきかき出て来るようだ。

広い江戸川の土手に出る、凧を上げる子供で和服にえり巻きでさゞめき合う娘

毎年、夏までには一年間の写真撮影を終了させることになっている。だから、今年の九月から十二月までに写す写真は、当然前年に撮影済みということになる。

この仕事を始めてから、十五、六年にもなる、と云うと「よく写す材料がありませんね」と言葉が返ってくる。たしかに県内、それも阿蘇・天草を中心に観光的な要素を含めて、美しく、一ヶ月間眺めていても飽きない風景となれば、当然に場所も限られてくる。しかし、よくしたもので自然は広く、同じ場所でも季節の違いや、天候の変化で新しい趣に写すことも出来るし、前景にとりいれる木や草花で、まったく違った風景をつくりだすことも出来る。

しかし、近ごろのように、いろんな標識や、ガードレール、電柱などが無造作に設置されると切角の美しい風景も殺されてしまう。口では自然を残そうと云いながら実に簡単に自然を消してしまっている。

このような状態がつけば、風景カメラマンはお手あげになってしまうだろう。

仙酔峡のミヤマキリシマの保護のため

達、どこにでも見られるお正月の風景である。

冷たい江戸川の風に顔をあぶらせながら、私はしばらくそこにたたずんでいた。(医師・随筆家)

## 熊本城

佐分利 ユリ

熊本城の御幸坂を登る。また一人であ。急いで歩くので半分は駆足で青空の五月は両側の石垣の下の桜が気持よきそらに揺れ、私の大好きな緑が目につめてほっと思づく思いで一杯であったが、六月はやはり雨、雨である、でもしつとりと雨あがりの風情も格別。

私は桜並木の下で手を伸ばしたり、足を踏みしめたり、苔の生えた楠の大樹は、枯淡の顔で私にせまる。あなたが見つけて来た明治十年の西南の役の戦の雄叫びや銃砲の音、そして城を守り通した熊本県人のねばりは如何だったでしょう。樹の下で私は思う。孤独ではなくとても楽しい。明治の初めは母方の祖父が美男子の軍医でこの坂を毎日馬に乗っ

に、関係者は大変な苦勞をなさっている。十年くらい前に写した写真を見ると、実に綺麗な色の「花の山」であったが、年々花の色が褪せて白っぽくなっていく。老齢なのであろう。植えかえも同時にやっておられるので、またもとの「花の山」になるにちがいない。

五、六年前、或るお役所の人との雑談のなかで、米塚の周囲にコスモスを植えて、観光客の遊び場をつくつたらどうか、と云つたらコスモスは阿蘇に自生する花ではないから、そういうことは考えられないという答えであった。あまりかたいことを云われると話もつづかない。

米塚の周辺には、幸いキスゲの花がたくさん自生している。この花と米塚をひとつの風景として美しくつくりあげていってほしいと思つているが、この花を増やすような考えをもっておられるのだろうか？

風景をつくる。といったら、おかしく聞えるかも知れないが、自然の保護(手当)ばかりではなく、新しい風景をつくるべく、ということを真面目に心がけてゆかねばならない時代になってきたようである。

(写真家)

## 帝釈天詣り

「こんどう・りょう」  
昨年暮れから急に東京行きを思い立った。医者が、暮、正月にいとやっかいな問題が必ず起る。

いゝことにはその頃、かゝりつけで心配な患者さんもいなかった。

三十日の夜こっそり逃げ出す気持で、熊本駅発十時頃の新大坂行、特急明星に乗り込む、帰省客と逆方向とあって、すでにセットされている寝台のいくつかは空席のようだ。

て熊本鎮台へと通つて行つたとか、次から次へ想いは広がる。だから坂を登る時は私は幸せである。私は心の故郷を持つているから、熊本に生まれて良かった。美術館に行く時はこの様に絶対に一人である。夢中になって作品を観賞する時は他人はわづらわしい。余韻を楽しむ為はその途中の道の往復は私だけの世界だ。宇土櫓が見える、空に私の心もあの様に雄大であれと叫ぶ。先日亡くなられたエリザベスサンダースホームの沢田美喜さんは人種の違つた沢山の子供達を育てられた。何と素晴らしい一人であろうか、それに反し私の小さな人生よ。三十五年前の熊本大空襲で私の一家十一人はばらばらと成り、一人明かした夜も熊本城の土塀の下であつた、あの頃我家は病人ばかりで、私もチブスあがりの体で一にぎりの米も持出していなかった、生きたい。何とかなるさと思つていたら、本当に何とかなつて生き続けた。其の後は苦勞しなかつたと言つて大嘘になる。だから視力はわずかで弱い体をひきつづけて歩く、五、六年前に茨木の子さんの詩の朗読をテレビで聞いた時頬を伝ふ涙は溢れた。大切なものを歳月と共に失くしている。のり子さんの詩は

わたしが一番きれいだったとき／わたしの国は戦争に負けた／そんな馬鹿なこと

とであるものか／ブラウスの腕をまくり卑屈な町をのし歩いた。

全く同感である。この三十五年前の焼け出され娘も今、緑のブラウスの腕をまくり挙げ、時には歌を口づさみながら駆足で美術館へ行く。わたしが一番きれいだったとき／わたしはともふしあわせ／私は淋しかった／と行を飛ばして書いてある。あゝ私は今から美しいものを沢山に見たい。沢山に聞きたい。そして私に出来るだけのお返しをされたらと思う。

排気ガスを散らしながら、タクシーやバスが走る。地底からこみあげる声を蓋をしたアスファルトの上をまなじりを上げてリーゼントの若者はオートバイを飛ばす。あゝ原点に帰りたい。頭山満翁の立雲に裸で乗る心境を想いながら、足下に平和に泳ぐお堀の鴨を見つめた。

(「知性と感性」同人)

## 風景をつくる

小松 哲也

梅雨がおわり夏が来ると、例年のことながら来年度のカレンダー印刷が始まる。